

せたかむい

発行・古平町史編纂室
古平町文化会館 42-2590
第128号・平成12年5月1日

年表で読む

古平の歴史

《35》

■漁業資金の貸付け

場所請負人の制度が廃止になつて、せつかく漁場が一般に広く解放されたものの、漁民の多くは漁をするための資金がありませんでした。

明治六年、地方を巡回していた開拓使庁の岩村判官は、貸し付けていた漁業資金の回収をしていないということで、古平出張所の伊沢少主典を免職にしてしまいました。その後、赴任した安田権中主典は、漁業の振興を計画して、独断で一万円余りを漁民に貸し付けることを約束しましたが、それが都合なことで、また免職にされてしまいました。

明治十一年に漁業資本貸与制

い。積立金の利息は積立金に繰入れる。」

この積立金の制度によつて漁業者全体の資本を増やし、官からの貸し出し分をだんだん減らしていきとういわけです。

■古平郡の状況

古平でも、何か統かの建網が官からの貸し付けを受けていたようで、これを取扱つていた戸長役場の記録が残っています。

証

一、金千三百円也

資本金元金

一、金九十四円九十八銭五厘

右の利子

右領収候也

古平郡各町村

戸長役場 回

この開拓使からの漁業資金の貸付けは大変効果があつて、漁業に従事する者も増え、定住す

る漁業者も次第に多くなつてきました。これにともなつて商人も店を開くようになり、飲食店も立ち並んで、町も次第に活気づいてきました。

漁船の数について、明治十九年に調べた表があります。

■鯨漁業と仕込み

明治二十年になり、北海道庁からのこの貸与制度が廃止になりました。

これにより鯨業者の中には、自己資金だけではとても漁場の経営が出来ない状況から、銀行などの金融機関や、資力のある一般商店や海産商などから仕込みを受け、着業する者も出てきました。

仕込みの方法には現金の外、必要な物を現物で仕込む、現金と現物の両方があり、漁が終わると清算されました。

郡部	三間以下	三間以上	四間以上	五間以上	計(隻)
古平	三七六隻	二七三隻	一一四隻	七隻	七七〇
余市	六三四	三六四	三七八	四二	一、四一八
積丹	五五六	一五六	二〇七	一三	九四二
美国	三三七	一六七	一一五	一〇	六二九

大正六年

7/19 今日もまた浜では

イワシがはね上がっているとい
う、リングの袋掛けを二、三人
でやっている、裏の増築分の建
前なので、大工五人と手伝いの
人が来ている

7/20 コナゴやイワシ
漁があつて、浜では思わぬ漁で
で活気がある

7/23 ダイコンまきがそ
ろそろ始まる、夜、禅源寺地藏
さんまつりがあり、大勢の人出
で賑やかだ

7/24 大正三年七月に買
った自転車のタイヤ、サドルが
破損したので取り替えた、タイ
ヤ十二円、サドル三円七十銭、
大分かかったがこれで立派にな
った、自転車も必要で便利なも
のだ、電話から見れば価値があ
る

7/30 明治天皇五年祭で
学校で式がある、イカもぼつぼ
つとれ出し中漁程度だ、六時頃
からまたイワシがとれたという
ので浜は賑やかだ、裸で網を引

いている人もいる

8/2 イカが今朝、この
頃で一番の漁があつた、五百
六百尾とれた、綿糸がこの日大
暴落、約百円も下がって三百二
十円ぐらいになった

8/8 散歩に出掛けたつ
いでに禅源寺に参詣する、境内
も広く建物も立派になった、帰
りに新開町の新道を通る、あち
こちに新道が出来て、今後この

高野名幸作さんの日記から



[29]

方面はますます発展するだろう
8/16 ばん馬競争の二日
目で朝早くから花火が上がる、
盆の十六日だから皆休みだ、別
にこれというものもないので美
国辺りからも見物客が来る

8/17 夏は暑い暑いとい
ってもう朝夕は涼しくなつて
来た、学校の方からラッパの音
が聞こえる、今日は簡閲点呼の
日だ、在郷軍人の人たちが軍装
をして町を行く

8/20 小樽へ出での帰り

四時半の富丸に乗り込む、六時
に古平着、恵比須神社のお祭り
の日で花火が上がり、境内では
相撲などがあり、町は賑やかで
ある、夜、二十日盆で墓参りを
する

8/25 浜に出て見ると川
崎船が四隻入港している、リン
ゴの積み込みである

8/28 昨日のスミス飛行
機見物で疲れ気味、飛行機見物
からの戻りの客で小樽駅は大混
雑、キップも買われぬ、ようや
く汽車に乗ったが車中は立ち通
し、余市に着いたら古平行きの
客が百人もいる、美国行きも五
十人ぐらいいて富丸は満船だ、
今日は四百人からの客があつた
という、古平町からは千人ぐら
いの人が見物に行つたろうとの
こと

8/30 今日も快晴だ、秋

始末には実に都合よい、58号一
本で八百斤(約五百キロ)程の
収穫があつた、二十円ぐらいい
なるだろう、これからは品質の
良いものを栽培していかなけれ
ばならぬ、美国から網の客が何
人かあり五十円余り売る、美国
は我が家の得意先である、農園
の境のスモモの木を全部切つた
ら広々となり、これで虫害も減
ることだろう、旭は見事な玉に
なつた、これからだんだん色が
着くだろう

8/31 快晴、蒸し暑い、
夕方になりにはわかに大雨、綿糸
は安くなったが、七月になつて
四百八十円に暴騰し、その後ま
た日ましに安くなり三百円にま
で暴落した、夜になり雨が止む
作物にとつてはよい雨であつた
9/1 昨夜から今晩にか
けての豪雨は実に近來まれだ、
今日は二十日だが平穩無事で
稲も安心だろう、畑で落ちリン
ゴを拾つたが、ひと担ぎ程もあ
つた、リングゴの木が混んできた
ので少し切らねばならぬ

(以下 次号へ続く)

古平の名勝地

(8)

霊場

観音滝のものがたり

にぎわった 観音滝霊場の
観音滝まつり 名が町内に知
れ渡るようになると、十月十七
日の参詣日には美しい紅葉と川
の清流を眺めながら、ここを訪
れる人の数も次第に増えて来る
と共に、秋の行楽を兼ねて、野
外での宴も盛んに開かれるよう
になりました。

また、滝のそばに安置された
観音像前での読経が終わると余
興なども行われ、参詣日は『観
音滝のおまつり』と呼ばれてに
ぎわいました。

観音滝霊場に 以前はドロノ
観音像を安置 キの滝とも呼
ばれていた滝の一带を霊場と
し、多くの人の信仰を集めるよ
うになりましたが、霊場を開い
てから六、七年ほど経ってか
ら、ここ一带に観音像を安置す
るという計画が持ち上がりまし
た。

どのような経過があつて、三
十三体の観音像を建設すること
になったのか、その間のことを
知る資料は全くありませんが、
昭和六年から、西国三十三番に
ちなんで観音像の建設が始まり
ました。

十体の観音像 昭和八年にな
る沿道に建設 して、観音像
十体の建設許可願いが北海道庁
長官に出されています。

形像建設許可願

古平郡古平町大字浜町字泥の木
古平川支流泥の木川上流(泥の
木部落ヲ隔タル約十五町)ニ仏
教信仰上観世音菩薩ノ石像建設
致シ度候条御許可相成り度此段
相願候也

昭和八年九月一日

古平郡古平町大字浜町

僧侶 秋田 岳 轉

北海道庁長官

佐上 信 一 殿

調書 × ×

一、形像ノ位置ヲ示セル地図
別紙図面ノ通り

二、形像ノ設置スベキ場所ノ種
目

原野(個人所有地)
三、形像及ビソノ土地ニ対シ個
人トシテ権利ヲ有スル者ノ承
諾書

別紙ノ通り(三通)

四、形像ノ物質製作方法並ビニ
ソノ設計図面

硬 石(花コウ岩)
彫 刻(石工師)

設計図面別紙ノ通り
五、礎石ニ表スベキ文字

年月日

六、形像ニ係ル事跡マタハ寓意

観世音菩薩
仏教上顯著ナル尊聖ニツ

省略ス

七、費用ノ募集及ビ支出

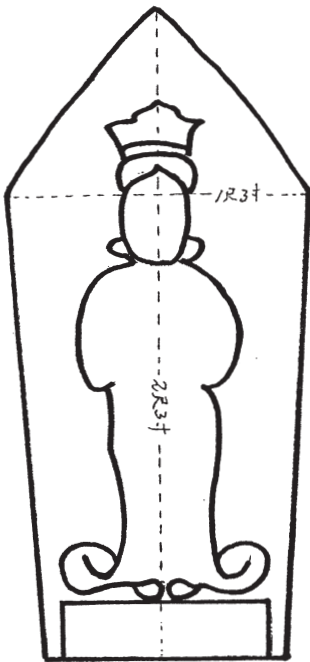
建設費用ハ願イ人ニオイ
テ負担シ、一般ヨリノ寄
付ハ求メザルモノトス

昭和八年九月一日ヨリ同
年十月十七日マデノ間ニ
観音像十体ヲ建設スルモ
ノナラン
ソノ建設費左ノ如シ
金百五十円也

八、形像ノ管理及ビ維持方法

出願人秋田岳轉監理維持
ノ責任ヲ負イ事務所ヲ禪
源寺内ニ置ク
毎年八月二十七日及ビ十
月十七日ヲ形像参詣ノ紋
日トシコノ日現場ニ行キ
修理手入レヲナシ、ナオ
臨時ニ付近部落民ニ特約

←(次ページへ続く)



〈岳轉和尚の原図〉



もっこ岩



竹内コト

私は沢江の浜のモッコ岩にそう遠くない所で生まれました。そのころは家の狭いこともあって、お天気さえ良ければ外で遊ぶことが多かったようです。春から夏にかけては、山や前の浜が格好の遊び場でした。

雪も解け、水も温んでくると海岸へ行きます。よく遊んだのはモッコ岩の周辺で、磯で海藻採りなどをし、それを朝夕のみそ汁に入れて食べたことを覚えています。

モッコ岩周辺はずうつと浅瀬なので、潮が引くと広い範囲を長くつを履いて歩くことができます。ホトケノミミヤワカメ、オオバノリなど食べられる海藻が沢山採れるのです。岩の陰の方に回るとそこは砂地で、ゴモなんかを引っ張るとアサリなどの貝が採れます。

また、モッコ岩の沖村側と浜

町側は船が入れるように深くなっている、古平でいうエン・カマになっっています。岩をそばから見上げると、四季を通じて実にいろいろな草花が生えていて、海面近くにはイワブキの花も咲いていて、花は小さいけれどもピンク色をした可愛い花です。

モッコ岩をたまに遠くから見ることがありますが、長い間風雪にさらされて、今見ると岩肌だけがごつごつしているようです。

鯀漁の盛んだったころには、ここに△仲谷さんのウインチが取り付けられていて、沖から運んで来た鯀を陸へ巻き上げていました。コンクリートで作ったその土台だけが今も残っています。もうそんなことを知っている人も少なくなっしまいました。

沢江のカレイ漁をする漁師の

人たちは、みんなモッコ岩の辺りに舟小屋やかぐらさん（舟を巻き上げる道具）を置いて、漁から帰って来る舟を待ち、家族総出でその舟を海岸に引き揚げました。

当時の舟はみんな手漕ぎでしたから、沖から一目散に陸に向かい、モッコ岩が見えてきて元気がわいてきたことでしょう。思い出のあるモッコ岩です。で、いつまでもゴメの群れる古平の象徴であってほしいと思っています。

※「もっこ岩」はおもしろい形をしていて、何となく親しみのある岩でした。その岩の形が、鯀を入れて運ぶもっこに似ていることから、「もっこ岩」と呼ばれるようになったといわれていますが、また一説には、その形がカエルにも似ていて、青森の方言でカエルのことをモッケというので、それがなまっでもっこ岩だということです。古平には青森から移住して来た人が多いので、なるほど、これもうなずけます。サテ、あなたならどっちでしょう。

（前ページ下段より続く）

シテ異状ノ報告ヲ受ケ、即時保繕ヲナス、コノ費用ハ出願人ガ負担シ、不足ヲ告グル時ハ古平祝聖会ヨリ拠出ス

× 請 書 ×

建設シタル土地ヲ公用ニ供スル必要アルニ当タリテハ、管轄行政官庁ニオイテ形像ヲ棄却マタハ移転スルモ故障ナク、カツ必要ニヨリテハコレヲ国ニ寄付スルモ差支エ無之此段御請候也

昭和八年九月一日

古平郡古平町大字浜町

出願人 秋田 岳 轉

承 諾 書

古平郡古平町大字浜町字泥の木

（一）番地

右拙者所有土地ニ観音像設置ニ付キ無償使用ニ供スベク承諾仕り候也

昭和八年 月 日

古平郡古平町大字浜町

土地所有者 原田 喜助

長見 サキ

木村長之助

—— 続 く ——

断章小説 「ふるさと遙か」

反抗の軍歴

VIII

士川 義雄

人は、青春の思い出に生きるものとか。来し方、時と共に消え去るものもあれば、年を経てますます鮮明に蘇ってくるものもある。

互いに安否を気遣っても、戦後の混乱期は、付箋のついた便りが幾度も舞い戻って来た。

友野雄作が旅を決意するまでに、戦後は五年も経っていた。東京はまだまだ戦禍の傷痕は深く、もう居まいと思つて来た上野駅に、親はどうなったのか、浮浪児と呼ばれる子どもたちがまだ大勢たむろしていた。

国民を戦争に駆り立てて、あげくの果てに、自国ばかりか、アジアの国々に計り知れない苦悩と不幸を強いた、軍国全体主義の為政者たちの所業は、幾世紀を越えても責められるべきである。人が人を殺して、神にな

んかなれるわけがない。国家の欺瞞の象徴みたいな大鳥居を横目で見ながら、友野は九段坂を下りた。

魚の干物をリュック一杯に詰め込んで、彼は下町の焼け跡に急造された引揚者住宅を探し廻った。

悲惨と言うしかない。住宅とは名ばかり、土の上にいきなり丸太柱を立て、土間から僅かにせり上がった床は、ロクな敷物もないままに波打っていた。

恩人からの便りに、バラックとは書いてあったが、彼が今、目になっているものは、急造の家畜小屋としか言いようのないもので、「これでも、入れた人は幸運だったんです」と、絶句している友野に、恩人は言い訳をつぶやくように言った。

南の島に居たときの一家は、

裕福な家庭であり、海軍の軍人であった友野は、異国の地で温かい家庭がうれしく、甘えるようにして、よくその家に行った。終戦、そして復員までの収容所生活中も、友野に対する一家の愛情は変らなかった。

主人と二人の男の子も居たが母親と、女学生の娘さんが、豪華な差し入れの食い物をよく運んで来てくれた。

夜を短くして語り明かしたその日から、またたく間にまたも七年近くが過ぎ去った。

札幌から、東京本社に研修に出た友野は、恩人の行方を探し求めた。夜警の仕事をしていた主人の職場は、意外な近さにあつて、友野はテレビ局での忙しい職場から、大急ぎで駆けつけた。以前とは見違えるほどに瘦せて、苦勞の陰を深く滲ませた老爺が一人、彼を待っていた。「友野さん、待っていました。みんな変わりました。婆さんはおとし亡くなりました。男の子どもたちは遠くにいます。美奈も結婚したんですが、今、病院に入っています。子どもが出来

たというのにその男とはオカしくなつて、死産でした。それから具合が悪いんです。」老人は深く息をしてから、嘆願するように彼に言った。

「友野さん、美奈に逢つてやって下さい。どうゆうわけか、美奈は友野さんのことばかり言ってます。逢つてやって下さい。美奈の奴どれほどうれしがることか」

南の島での初々しい女学生。前回訪問した時の見違えるほどに美しく成長した彼女を想い浮かべて、彼はお見舞を約束した人の運命(さだめ)ほど予知出来ぬものは無い。友野自身もまた、それに翻弄されていた。彼の妻もまた、入院中であり、美奈の病床を尋ねる前に、あわただしく札幌に帰らなければならなくなつた。

友野が帰つて間もなく、彼の妻は亡くなり、それから幾月も経たない内に、まだ慟哭の心の旅路をさまよっている彼の許に美奈の計報が矢のように突きささつてきた。

(この稿終わり)

遙かなる故郷の思い出

わが闘病日記

[65]

橘 義 春

癌編

—その一—

ガンー癌という文字を生まれて初めて漢字で書いてみたが、人の体に深く静かに潜入して命を狙ういやな奴で、そら恐ろしい文字のような気がしてならぬ。

私の親戚でもガンで亡くなった人が非常に多い。

積丹の私の両親で、父は皮膚ガン、母は頭のとっぺんと側頭部に握りこぶしの大の大きなガンが二つ出来て亡くなった。そして一番上の兄は胃ガン、函館の二番目の兄は大腸ガン、札幌の叔父と従兄弟は胃ガンで亡くなった。古平の祖母は昭和三十五年に、悪性の胃ガンで亡くなっている。美国の伯父と釧路の伯父は、共に胃ガンで亡くなっている。東京で米屋をしていた

伯父夫婦はそろって胃ガンで亡くなった。東京にいた二人の弟も同じ肝臓ガンで亡くなった。東京ふるびら会の湯田会長夫婦は私の伯父と伯母に当たるが、伯父は肺ガン、伯母は大腸ガンで共に亡くなってしまった。

詳しく調べたらもっと多く出てくるのではないか。ガンは橘一族にとって、最も憎むべき仇敵であると思っている。

平成九年六月、私の住んでいる小金井市の広報で、成人の大腸ガン検診があると知らされた。私はガンの検診には深い関心があったので、ほとんど毎年、便潜血検査を欠かさず受けていたが、結果は陰性で異常無しだったので、今回も軽い気持ちでくろだ先生の検査を受けた。

六月十六日の午後四時ころ、

くろだ先生から電話がかかってきた。検便の結果、陽性の反応が出たので精密検査を受けてください、とのことであった。

大便に血の混じっているのが見つかったので、原因を調べるために大腸のレントゲン検査をしましょうと言われて、それから、軽い気持ちでお願いしなすと言ったが、二十年程も前のこと、トイレへ行つてけつぱつたら大きなオナラと共に真っ赤な血が「ドバツ」と、白い便器いっぱいに広がったことを思い出した。

これは大変だと、近くの名医と評判の高い外科病院へ飛び込んだことがある。先生へ状況を説明したら、やおら右手にゴム手袋をはめて、私の尻へ人差し指を入れて探っていたが、「イボ痔」があるのでそこからの出血だから大丈夫だと言われ、ホツとしたことがある。

今回の潜血検査も、毎年やっていた異状無いのだから大丈夫だ。「イボ痔」からの出血であろうなどと、自分に言い聞かせて高をくくっていた。

前日にくろだ先生から渡された検査用食事を三食とってから下剤を飲み、おなかを空にして、六月十八日、肛門から造影剤を大腸に注入して、角度を変えレントゲン写真を十枚程撮影して終わった。

その後の先生のお話ですと、私の大腸の一部が狭くなっているところがあると、大きな写真を見せられた。確かに大腸の一部がぬれタオルを絞ったときのように、ロープ状になっている個所が見みる。

くろだ先生は、大病院で検査を受けた方がよい、希望の病院があればそこへ紹介状を書きますから、と言ってくれたので、脳梗塞とベースメーカー植えこみで手厚い看護を受けた杏林大学病院を指名した。くろだ先生は快く引き受けてくださり、すぐに杏林大学の跡見教授への紹介状と、レントゲン写真の入った大きな封筒を手渡して、跡見先生に渡してくださいと言われた。

(次号へ続く)

「思い出を刻む 孫からの便り」

渡 辺 ハ ツ エ

道内各地にも、桜の便りが聞かれるようになりました。今春中学校を卒業された生徒さんたちは進学に就職にと、夢と希望を胸に人生のスタートを切りました。それぞれの夢を実らせ、りっぱな社会人になられますよう祈ります。

過日、私に、札幌の美容院に勤務している孫娘からの便りが届きました。

「久しぶりにおばあちゃんからのお便り、うれしくて何度も読み返しました。おばあちゃん、とっても元気そうなので、私は安心しました。これからも健康に気をつけて、元気でいて頂戴ね。」

と、いつの便りにも私を氣遣ってくれています。
孫娘が自分で選んだ道。
「美容院に就職して三年目の春

を迎えました。仕事が少しずつ出来るようになって、今はお客様の髪のカットもどうやら出来るようになりました。」
と、私を喜ばせてくれました。
過日は、美容師の国家試験に合格したという朗報も届いています。祖母としてはうれしい限りです。これからも健康に留意して、誠実で明朗、そしてお客様に好かれる美容師になってほしいです。

かえりみるに、孫は小学校低学年のころには、両親は仕事の都合で留守のときがありました。そんなときにはわが家の電話のベルが鳴り、受話器をとると、「おばあちゃん」と孫の声。「あら、あっちゃん、今帰ったの。ごろうさん」と、私とよくおしゃべりしたものでした。よく手紙もくれて、私も書

くの忙しかったものでした。高学年になるにつれて手紙は少なくなりましたが、勉強や部活などで忙しかったのでしよう。小学四年生のときに、おじいちゃん、おばあちゃんと刺しゅうで名前を入れた、孫の手製の

クッションを二枚送ってくれました。

私は、あの当時の孫からの手紙も大切に保存してあります。いろいろと楽しい思い出をくれた孫に感謝しているこのごろです。

川 柳

陽に向かい転んで起きて人生路
ニューヨーク美術見学孫が行く
とまり木に五十年止まり共白髪
昔からあくび伝染病にされ
世の中が便利良過ぎてゴミ増える

石 井 愛 子

渡 辺 ハ ツ エ

△あとがき▽にかえて

旧暦では太陽の動きから一年を二十四に分けて、季節の変化を表していました。今もほとんどの暦に載っています。五月五日・こどもの日は「立夏」です。山野に新緑が目立ちはじめ、風もさわやかになって、いよいよ夏の気配が感じられる、という時季です。新暦では一か月ほど遅れていますから、残雪がわずかに見られ、ようやく桜が咲きはじめて、春満開という北海道にはぴったりのようです。

—— お詫びして訂正いたします ——

① 寮母さんが包みてくれし桃の花蕾多きを労はり帰る 奥山きよみ
② 寮母さんが包みてくれし桃の花蕾多きを労はり帰る 奥山きよみ
△あとがき▽ ③ 2000.4.10=15 ④ 2000.4.10=15

吉平岬短歌会四月詠草

吉平ホトトギス会

池田 テル

櫛 佳代

鈴木 時子

竹内 コト

田中 香苗

丹後 初江

堀 典子

奥山 きよみ

東 美知

山口 スエ

元日に咲き始めたるオキザリス紫淡く今に咲きつぐ
わが丈を越す雪壁のなか通り夕べの菜を買はむといそぎぬ
朝あさを撒き餌を待ちて集ひ来る雀子たちの何故に馴染まぬ
立ち込めし靄うすれゆき見慣れたる雄冬連峯に朝日さし初む
如月の声きく今朝の陽の眩し春の足音近くに感ず
湿りたる雪が屋根より落つる時重おもと大音たて恐ろし
喧騒を逃れむと来し地下道に己が靴音ひびかせ歩む
歌の友が舞台に踊る男舞袴の股立ち高く凛々しく
若き友二人訪ひくれ久々に笑ひ声あぐ茶の間はぬくし
春来なば音立て大地に消ゆる雪親しくも思ふ陽の差しければ

斉藤 波留

山口 悦子

越野 敏雄

大和田 絵伊

福井 幸平

関口 勝志

よしざき り

仲谷 比呂古

越野 清治

室谷 弘子

禅寺の深きひさしや残り雪
館山の旧友よりの花便り
妻の忌やたむけし如くアマリリス
啓蟄や旅出のスーツ新調す
朴芽吹く集る小鳥名の知れじ
人住まぬ家の廻りのふきのとう
片時も手休ませじ海苔を掻く
叱られて涙あふるゝ寒稽古
強東風の沖へ沖へと波白し
窓を打つ春一番も夢現(ゆめうつつ)

すでに皆さん方もご承知のことと思いますが、永い間、短歌欄に投稿してくださいました菅原節子さんがお亡くなりになりました。最後の例会に寄せられた一首をご紹介します、そのご冥福をお祈りいたします。

孫よりの水玉模様のヘアーバンド心楽しく鏡に向かふ